

# 琉球大学学術リポジトリ

## [創立35周年に寄せて] 日本熱帯農業学会との合同シンポジウム

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上里, 健次 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015489">http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015489</a>

## 11. 日本熱帯農業学会との合同シンポジウム

上 里 健 次  
(琉球大学農学部)

沖縄農業研究会の設立を、学部学生の立場から見た者の一人として思い出されることと、その4年後に日本熱帯農業学会との合同で開催されたシンポジウムについて記しておきたい。本研究会が設立された1962年5月は、筆者の学部4年の新学期時であった。当時は卒業論文も必修ではなく、ごく少数の学生のみが卒業研究ということで履修していた頃である。調査研究用の測定機器などほとんどなく、研究に対する心の準備もない中で、文系ビルの大教室で開かれた第1会の研究発表会と特別講演会は、無知に近い学生に対しても強烈にインパクトを与えるものであった。各研究発表の内容についてはほとんど覚えがないが、当時の学

内で最も大きな文系ビルの講義室が多くの参加者で埋め尽くされ、初めての学会会議ということで熱気があふれていたと、今でも思い出される。

当時は学部事務室に普及事業の係りがあり、その普及係の任務は月一度の「農家便り」の発行で、家政学科を含む農家政学部の各教官に原稿を書いて貰って編集印刷し、各関係機関に発送することであった。国立大学に移行の際に該当する職種が無く、結局廃止となったが、事務部と教官の間にある学科付き助手のような立場で、極めて融通の利く職種であった。私自身も3年間の高等学校教諭の職歴の後で2年間勤めたことになるが、本研究会設立の際に、またその後においても

研究会の運営に関わる種々の雑用の仕事を任されたようである。

普及係の勤めを2年間続けた中で、農業研究会との関連で特記すべきことは、1966年7月における、日本熱帯農業学会との合同開催によるシンポジウムの取りまとめである。日本熱帯農業学会の沖縄大会は1966年7月16日から3日間の日程で開催された。特別講演、研究発表、シンポジウム、現地視察のプログラムが進められたが、シンポジウムの課題は「熱帯農業に対する沖縄の寄与」で、各話題と話題提供者は次の通りであった。

総合司会	西川五郎（東京教育大学）
熱帯作物を中心にして	西山喜一（東京農業大学）
病虫害を中心にして	高良鉄夫（琉球大学）
熱帯における企業を中心にして	稲嶺一郎（琉石産業研究所）
移住と経営を中心にして	内田重雄（東京教育大学）
学生の活動を中心にして	高井 泉（玉川大学）

筆者はこの年の4月から、前述の普及係に転勤して

きていたが、このシンポジウムの内容について、とくに沖縄の農業に関わる課題であることから、学会事務局の許可を得て「農家便り」でも取り上げることにした。録音テープの掘り起こしは初経験で、当時同職にいた平田栄二氏と四苦八苦しながら長時間かけてまとめ上げた。そのまとめたものは、同年発行の「農家便り」第129、130号の2回に分けて掲載した。この「農家便り」はすでに25年前に廃刊になって、僅かに農学部図書室の隅に眠っているのみだが、当時の沖縄の農業を知る貴重な資料の一つである。

当時は復帰より6年も前のことで、前もってのパスポートの準備は勿論のこと、航空便による移動が出来ず、鹿児島からの定期貨客船による来島のみであった。7月中旬の暑いさなか、東京からも多くの第一線の研究者が参加し、歯切れの良い専門用語が飛び交う学会会議は、地元の参加者に多くの示唆と感銘を与えたことであった。とくに当時大学院進学準備中であった筆者にとっては、好都合の機会だと感じながら雑務の手伝いや、録音テープの準備、写真撮影などをしていように思う。なお、日本熱帯農業学会は1975年にも再度沖縄で開催されたが、沖縄在住の学会員は多数いるに関わらず、沖縄農業研究会との関わりはなく、時代が変わったことと実感させられた。